デュルケームの「プラグマティズム」講義

清水　強志

'Pragmatisme et Sociologie' chez Durkheim

SHIMIZU Tsuyoshi

はじめに

デュルケームはソルボンヌ大学において,『宗教生活の原初形態』(1912年)発刊1年後の1913年12月から「プラグマティズムと社会学」の講義[1]を行っている。彼自身，本講義テーマを「選ばざるを得なくなった諸動機」として，第一に，プラグマティズムが現在実在するおよそ唯一の真理についての理論であったことをあげている。デュルケーム自身,「真理」に関する関心は『宗教生活の原初形態』よりも前から存在していた。それは彼自身が時代と空間によって道徳,理想および真理が変わるという認識のもとに社会学を構築し，そこから教育論や道徳論などに言及していたからである。第二に，社会学と共通の生活と行為の感覚が存在することをあげている[2]。そして，第三の理由として，プラグマティズムは「理性に対する襲撃」をしており，その主張が正しいとするなら，本質的に合理主義を基礎としているフランスの精神すべてを変えなければならないということになるので，プラグマティズムについて検討する必要が生じたと述べている[3]。

とはいえ，デュルケームはプラグマティズムによる主張を完全には否定していない[4]。むしろ，事実認識に関しては好意的ですらある。それはデュルケームが『規準』執筆の時より，一貫してフランスの伝統的合理主義を批判していたことに通じるからである。それゆえに，デュルケームにおいて，プラグマティズムの受け入れられなかった点とは，ネオ合理主義を主張した

デュルケームと異なり，プラグマティストたちが理性そのものを否定したことである。講義の中でデュルケームは彼らの批判する理性とはどのようなものなのか説明することに時間をかけている。つまり，彼らの批判する理性とは理性のすべてではなく，デュルケームが批判する理性と同じものなのであり，それゆえに，プラグマティストがそれを理性すべてと勘違いしたことから誤った結論に至ってしまっているととらえられている。

ところで，「プラグマティズム」講義は講義草稿が失われたために，2人の学生のノートをもとにキュヴィリエによって編纂された（1955年）。作田啓一は著書『デュルケーム』の中で「本書の原稿はデュルケーム自身の手によるものではないので，抜粋は行わない」（作田 1983：275）と述べ，簡潔な要約を記載しているだけである。しかしながら，私自身，デュルケームの検閲がなかったことに対して，逆に注目している。他の著書には見られないデュルケームの具体的かつ詳細な説明を見ることができるからである[5]。また，昭和31年には日本において邦訳が出版されているが，誤訳が多く信憑性に欠けている[6]。デュルケーム社会学を知るうえで非常に重要な文献であるにもかかわらず，日本ではほとんど読まれていない。

そこで，本論文の目的はデュルケームがプラグマティズムをどのように理解して，どのような評価を行っているのかを明らかにすることにあり，さらにそこからデュルケームにおいて今まで重要視されてこなかった構想を確認することである。付言すれば，本論文で私が重視することは，デュルケームによるプラグマティズム解釈に誤りがあるのかどうかを検討することではなく，デュルケームがそれをどのように理解し，その結果，何を強調したかったのかを探ることである。「プラグマティズム」講義は晩年におけるデュルケーム社会学の全体をつかむためには，決して外すことのできない重要な本である。とりわけ，『原初形態』を補足する「真理論」およびシンボリズム，合理主義と経験主義に関する総括的発言は重要である[7]。

1. プラグマティズムにおける独断論（合理主義）批判

デュルケームは，プラグマティズムを一体系ではなく，ある同一方向に向けられた一般的衝動であり，(1) 1つの方法（精神態度），(2) 1つの真理論，

(3) 1つの宇宙論という3つの特徴を共有しているという。方法とは，諸問題に直面した時に知性が採用しなければならないプラグマティズムの一般的態度であり，「実践的結果にならって，それぞれの概念を解釈しようと試みること」(Durkheim 1955：44) なのである。また真理論に関しては，プラグマティズムは有用性を真理論として示している。そして，「真理論としてプラグマティズムを理解するのに必要である限りにおいてしか，それを《宇宙論》として論じられない」(Durkheim 1955：44-45.) とデュルケームは述べている。以下においてデュルケームの理解したプラグマティズムについて要約する。

ジェイムズによれば，独断論的すべての概念（合理主義）の中で，真理は外的な実在の転写（transcription）としてしか存在できないことになり，またこの真理は知性の外に存在しているので，非人格的ということになる。それゆえに，真理は人間を表現せず，また人間に起因しないことになる。そして，真理は既成のものになる。「結局，独断論にしたがえば，真理は外的で非人格的であると同時に，真理は＜完成された＞システム，つまり，時間と変転を免れた完全な全体ということになる」(Durkheim 1955：47.) とジェイムズは考える。そして彼は独断論（合理主義）における欠点として以下の5点をあげている。第一に，真理が実在の単なる転写なら，真理は無用な冗長ということになってしまう。しかし，真理が無用なはずがない以上，繰り返しではなく，「付加」でなければならない[8]。第二に，観念が模写で，ある実在が外的で超越的というのなら，われわれはそれを知ることができなくなってしまう。理想世界とわれわれの間には深い溝があり，プラトンが述べたように，精神にいかに特別な力（pouvoir）を付与しても困難は除くことができない。「真理＝模写の理論」の中では，われわれが所有しているものは常に模写であり，実在はそれを越えて存在することになる。そのような理論は論理的に認識の破綻に導かれるので，この困難を解決するためには実在と思考の間の間隙（vide）を認めなければいい[9]。ジェイムズは「この部屋の壁と言う時」を例にあげて，感性的知覚において知覚された対象とわれわれがそれについて抱く表象は区別されておらず，実在は知覚そのものになると説明している。つまり，その時物質的なものは心理的なものと同一内容を有しており，主体

と客体は1つであり，諸事物は仮象と異なる「隠れた生命」など持っていないというのである[10]。

第三に，真理が非人格的なもの，つまり，人間とは関係のないものであるというのであれば，真理は人間と関係のないものになり，またわれわれの生活の外側に位置づけられてしまう。それゆえに，真理は人格的なものであるとプラグマティストたちは主張する。つまり，「真理は，精選された選択の道によってしか決定され得ない。また，この選択を決定するものは，人間の関心である」(Durkheim 1955：55)。それゆえに，われわれが実生活において真実に関する問題が生じたときには，状況に対応していることになる。なぜなら，「決して『大文字のVを伴った単数の真理（Vérité)，つまり抽象的真理（Vérité abstraite)』を問題にせず，臨機応変に多かれ少なかれ時宜に適うことのできる『具体的な諸真理（vérités concrètes)』が常に問題であるからである」(Durkheim 1955：54)。こうして，プラグマティストたちは非人格的な理性を否定して，「真理は人間的であり，知性は生活から切り離せない」ということで意見を一致させ，「真理はわれわれ人間の『利益』に関係づけられなければならない。真理は人間の生活のために作られている」(Durkheim 1955：56）と主張する。

第四に，独断論の述べるように，真理がすべての人々にとって同一であるなら，われわれはもはや精神の多様性が存在する理由を理解することができなくなってしまう。そこで，「人間の諸真理は，はかなく，一時的で，絶えず変化の途中にあるものである。今日の真理は，明日の誤謬である」(Durkheim 1955：56-57)。独断論における普遍的真理とわれわれが体験する具体的真理はまったく正反対の性質を有していると主張する。また，すべての精神に共通する唯一の悟性（emtendement）というものは存在せず，存在するのはお互いに非常に異なっている諸々の悟性である。したがって，精神が多様性を有している以上，1つの真理の発見を求めるというよりも，多様な真理につながっていると考える方が論理的であろうと彼らは主張している。シラーは「肘掛け椅子」の一例をとりあげて[11]，ある人にとって真なるものが他の人にとっても必然的に真実にならないことを説明する。それゆえに真理は合理主義者が認めている以上に，非常に複雑な何かであるということ

を，なぜ認めないのかとプラグマティストは問いただす。

第五に，唯一の真理が存在することを人々が認め，諸判断と諸意見の多様性がその存在理由を有していることを理解しない場合，人は「不寛容(intolérance)」に行き着く危険性を有している。真の寛容とは，諸見解の間に差異が存在し，それらの差異を尊重することである。そして人は意識に無理強いをする権利を持っていないということを認めるだけでなく，感情的・知的な生活の諸要求に一致しているということも理解しなければならない。それゆえに，相違が存在することそれ自体が「善いこと」になると主張する。

上記の独断論における欠点から，プラグマティストたちは，もし実在が生きている何か，つまり，変化し，絶えず新しいものを発生させるなら，真理はその諸変化の中で実在に従い，真理もまた変化し生き続けなければならないと考えるに至る。彼らは合理主義の精神が安定，確信といった「安らぎへの欲求」であり，それをあらかじめ決まっている作法や規範，あるいは1つの真理が存在することに求めても無意味であり，われわれは自分しか当てにできないと主張する。それゆえに，プラグマティズムを支配する感覚は，独断論と正反対で，事物における変わりやすいもの，可塑的なものすべての感覚である。それゆえに，プラグマティズムにとって宇宙は，未完成で決して完全に実現されない何かを持っているものになる。ジェイムズに従えば，合理主義にとって実在は既成のもので完成されたものとして与えられているが，プラグマティズムにとって実在は常に作られつつあり，将来その外観が完全なものになるのを待ちかまえている。プラグマティズムにおいて宇宙は絶えず冒険の流れを継続している。そして，継続した流れの中で生じた諸々の新しいものは表面だけのささいな事柄に関わるだけではなく，本質的な部分に関わるという。

そして，世界におけるこの新しさの主要な要因をなすのは「意識」である。ジェイムズは大熊座の例から，ヒトは表現し，発見するだけでなく，付け加え，創造をしていることを指摘している。そして，その時思考は実在のコピーではなく，紛れもない創造を行っているのである。精神がもたらすこの新しさは未来が問題となる時にはさらに明白になり，その時，われわれの判断は未来の実在の性格を変える諸行為の発生機になる。信念は，実在そのものを

創造しており，成功への信念は成功するための最良の条件となる。「思考は存在するものの表現ではなく，来るべき実在の要因である。したがって，実在それ自身は，越えられない限界の中で，硬直し，固定し，閉じこめられた何かではない。実在は，絶えず人間の経験とともに前進する。人間の経験が広がるにつれて次第に実在は虚無を浸食してゆき，その結果豊かになるのである」(Durkheim 1955：65)。こうして，デュルケームはプラグマティズムが根拠をおいている「行為と結びついた思考は，ある意味で，実在それ自体を創造する」(Durkheim 1955：65) という主要な観念に行き着く。

ところで，プラグマティズムの方法が適用される例は，物理的世界における認識に限らず，人間的序列の事柄においてもほとんど見ることができないとデュルケームは述べている。つまり，人々はその方法が道徳問題に適用されることを期待するが，事実上，プラグマティズム的道徳は存在しないと (Durkheim 1955：129) [12]。そして，プラグマティズムの方法が取り扱ってきた唯一の問題は宗教の問題だとデュルケームは指摘する。ジェイムズによれば，宗教の価値がどのようなものなのかを明らかにするには宗教的特性を示している個人意識の本質的経験の中で見つけなければならない。つまり，彼にとって宗教を探るには固定されないことが大事なので，具体的現実は宗教の硬化した制度や教会を排除してたどりつくことのできる個人経験から成り立っていると考えるのである。実際，彼は宗教が真実かどうかを探るときに，哲学者や神学者を軽蔑して退ける一方で，神秘的直観 (les intuitions mystique) に対しては寛大さを示していると考える。

ジェイムズの考えに関してデュルケームは「神秘的な経験の基礎にあるもの，それは実在との直接的なコミュニケーションであり，また感覚が事物の理解力である限り感覚に類似した何かであり，事物についての認識ではない。この種の感覚を感じた人だけが神の力を感じたのである」(Durkheim 1955：133) と述べている。つまり，ジェイムズによって宗教的基礎にあるとされるものはわれわれよりも偉大な何かが存在するという考えである。そして，この考えは同時代の心理学者が重要視している潜在意識あるいは閾下の自我という概念につながるとジェイムズは述べている。つまり，正常な意識の領域の他に異なった性質の心的実在にかかわる意識が存在し，そこにインスピ

レーションや急なひらめきが生じるというのである。それゆえに，彼によれば，宗教の科学は万人に認められた心理的事実に根拠を置くことができ，同時に人間は宗教的経験において自己を超越する力の作用を受けるという考えも弁護できるのである。そして，経験的に確認できる結果によって神の存在を証明する実験的な力の1つに神はなるのである。こうして，ジェイムズは宗教的経験が要請する真理は唯一で絶対である必要はないとして，一種の多神教の立場をとっているとデュルケームは指摘する。

2　プラグマティズムの独断論批判に対するデュルケームの評価

上記のようにプラグマティズムを理解したデュルケームは，スペンサーなどの実在の静的概念から引き出される「われわれ自身が錯覚や一時的な仮象でしかなく，またわれわれが錯覚でしかないものや移りゆくものにたくさんの価値を結びつける」という結論に対して，「ある意味では，幻想を性格付けるものの実在を認めないだろうか。これらのいわゆる『仮象』に1つの意味を与えていないだろうか」（Durkheim 1955：62-63）と述べている。つまり，彼はプラグマティズムにおける「行為と結びついた思考は実在を創造する」という観念に同意する。しかしながら，彼はプラグマティストたちのように宗教論だけに陥るのではなく，道徳論および真理論の視点から眺めているという相違点が存在する。「この観念は重要である。おそらく，物質界（le monde physique）は今日，一種の均衡に達しているように思われる。生物において，われわれはもはや新種の発生を目撃しない。しかし，道徳的領域において，そのような創造は常に生じる。すべての人間社会は，発達する力であり，常に自分自身と同一のままでいるどころではない。新しい力が生じるより複雑な諸社会が現れる。過去が問題となる時，われわれが静的にしか，もはやわれわれに思い起こさせえないこれらの力が現在において仕事をしているのをわれわれは見る。いずれにせよ，明らかに思考によって創造された実在の一領域が存在する。それは『社会的実在』であり，この例はわれわれが引き合いに出し得る中で間違いなくもっとも意義深いものである」（Durkheim 1955：65-66）。つまり，思考によって創造されたその実在こそ「社会的実在」だというのである。

さらに，ジェイムズは「真理は諸変化の連続したプロセス」(Durkheim 1955：66) ととらえており，真理が豊かで複雑であることをうまく指し示しているが，厳密には結果として真理が変化していると言えるのだろうかとデュルケームは疑問を投げかけている。プラグマティズムの中でわれわれの関心を引くものは，論証の方法ではなく，精神の多様性と思考の変化性という生き生きとした感情および真理に関する生きた性質の感覚であると彼は高く評価する一方で，それらを説明するのに失敗していると断言する。即ち「プラグマティズムは，なぜ個は存在し，またなぜ精神の多様性が存在するのかという自分を越える哲学の一般的問題の１つにぶつかること」(Durkheim 1955：59) になり，その説明ができない。そして，この「多様性の感覚」以外に関しては，デュルケームはかなり詳細にかつ徹底的にプラグマティズムを批判する。具体的には，第一に，自ら経験主義と称しながら，その内容は抽象的になっているという矛盾が存在することである。つまり，プラグマティストたちは立論にあたり，弁証法的な性格を有しているが，そのとき歴史上の諸学説を自分勝手にしかも不正確に解釈しているという欠陥があり，しかもそれ以上に重要な問題として抽象的になってしまっているということがあげられる。結局のところ，プラグマティズムの行う証明は単なる論理的構成になっているというのである。第二に，プラグマティストたちの思考には，一方では付帯現象説 (Epiphénoménisme) [13]，他方では観念論 (idéalisme) という相容れないものが存在する。つまり，彼らは一方では，意識はそれ自体としては存在しないし，なんら根源的なものを許さないと述べながらも，他方では実在は思考の構成であり，実在的なものとは知覚そのものであると主張しており，そこには矛盾が見受けられると。

それでは，なぜプラグマティズムは欠陥を持ちながらも急速に人々の間に広まったのだろうか。それはこの学説が今後発見すべき一種の力を有しているからであるとデュルケームは述べている。つまり，プラグマティズムを支配しているのは真理を論理的思考の規律から自由にするという欲求であった。思考が実在をコピーすることを目的とするのであれば，思考は事物の奴隷となり，実在に鎖でつながれていることになる。そこで思考が解放されるためには実在の創造者にならなければならないと主張したのである。こうし

てプラグマティズムにおいて思考は実在をコピーするのではなく，未来の実在を構成することを目的とすることになり，観念の価値は客体との関係ではなく，有用性の程度に応じて評価されることになる。プラグマティストにとって真理を柔軟にするとは，実在における絶対的・神的性格をはぎとることだったのである。真理がその本性上実在や生命の一部をなすと仮定するとき，真理は科学の対象になる。これこそプラグマティズムの企ての中心をなすものであり，そこには真理や理性を理解しようという努力，およびそれらに代わって人間的関心を取り戻そうという努力，そして人間的事物を作り出そうという努力がみられるとデュルケームは理解する。

そして，ここにプラグマティズムと社会学の対比が確立できるとデュルケームは指摘する。即ち「実際，歴史的視点から人間的諸事物の秩序への適用によって，社会学は同じ問題に導かれる」(Durkheim 1955：142)。人間は歴史の所産であり，それゆえに人間においてはあらかじめ与えられているものも，限定されているものもない。したがって，真理が人間的なものであるなら真理は人間の所産であり，社会学は同じことを理性にもあてはめる。「理性を構成するものすべて，つまりその諸原理，諸カテゴリーは歴史の流れの中でつくられたのである」(Durkheim 1955：142)。現象は閉ざされた連続の中で表されるはずがない。それゆえに，はじめに思考があるという観念論者も，はじめに行動があるというプラグマティストも認めることができない，と。

社会学は同じ問題を提起してもプラグマティズムと同じ解決を主張しない。ここでデュルケームはプラグマティズムと心理学を重ねてみている。即ち「プラグマティズムは真理を心理学的に，つまり主観的に説明することを望んでいる。ところが，すべての人間的な事物に関して個人の本性だけで説明できることには限界がある。もっぱら個人的諸要素しか考慮に入れないということは，諸結果において説明することが必要となっている豊かさを不当に軽減することを生じさせる。(中略) 社会学において真理，理性，道徳は人類史におけるすべての展開を含む生成の結果である」(Durkheim 1955：143) と。デュルケームによれば，プラグマティズムは理性と感情を同一のプランの上に位置づける反面で，ある意味で感情や個人的衝動から独立してわれわ

れに押しつけてくる何かを真理のなかに認めているという。「実在やシンボルの一致を疑うことと，シンボルによって象徴化された事物を拒絶することは別のことである。ところで真理による諸精神の上への認められた圧力は解釈する必要がある１つのシンボルである」（Durkheim 1955：144）と彼は述べている。

結局，プラグマティズムは個人的経験に由来する精神状態と集合的経験に由来する精神状態の間にある二元性を誤認したのであり，他方，社会学は社会的なものが常に個人的なものよりも上位にあることに注意を促しているので，真理が理性のように高い価値を有していることを推測できるのである。

しかしながら，プラグマティズムは歴史の過程において真理と誤謬が混合していることを非常によく見抜いていたとデュルケームは指摘し，プラグマティズムにおける真理の変化のとらえ方について言及する。彼は真理が変化に支配されていることを証明するためにプラグマティズムが与えている論拠を２つあげている。

1) **実在が変化する以上，真理も変化し得る。ここから時間における変化が生じる。**
2) **真理の単一性は精神の多様性と相容れない以上，真理はただ１つだけということはありえない。ここから空間における変化が生じる。**

プラグマティズムにおけるこの論拠の説明は不十分であるが，この２つは真実であり，また社会学はその根拠を示すことができるとデュルケームは述べている。社会学は物理的環境と人間の間の関係にもとづく「相対主義」を導入する。物理的環境は相対的固定性を提示する。もちろん，物理的環境は進化に支配されているが，それは以前の状況でいることをやめて新しい要素から構成された実在に席をゆずる訳ではない。つまり，オリジナルな世界はその後現れて豊かにした付加物のもとに依然として存在しているのである。それは現代のフランス社会がガリア，ゲルマン，ローマの諸要素からできあがっており，かつもはや単独の状態で判別することはできないというのと同様である。社会的環境は何らかの新しい物を有しているので相互に異なって

いる。しかし，家族の例が示すように，家族は歴史の中で発展する一方で，その機能は同一で依然として家族なのである。それは政治体制，道徳，宗教においても同様である。「ひとつの宗教，ひとつの道徳，ひとつの政治体制は存在せず，異なる宗教の諸々の型，異なる道徳の諸々の型，異なる政治の諸々の型が存在するのである。こうして，プラティックな秩序の中で多様性は確立したとみなし得るのである」（Durkheim 1955：147）とデュルケームは述べている。

ところで，同一の行動の価値が変化したなら，それは思索的思考が変化したということである。そして，思索的思考が変化したということは真理の内容が変化したことになるのではないだろうかと彼は指摘している。行動は思考からわけることができない。われわれに先立つ諸世代が完全な誤謬や錯誤の中に生きていたと認めることはできない。なぜなら誤った思考は挫折などの苦痛を生じさせ，不適合な行為を限定するからである。それゆえに，プラティックが変化することと同様に，思索的・理論的思考は変化する。美的思索も変化している。そして，思索とその価値が変化し得るということは，したがって真理も変化し得るということである。「これらの変化は時間においてだけでなく空間においても生じている。すなわち，もはやそれはある社会から他の社会へというのではなく，同一社会で生活する諸個人の間で生じるのである。実際，社会における過度の等質性はその社会の死となるであろう。いかなる社会集団も完全な等質性の中では生きることも，何よりも進歩することもできない。プラティックな生活と同様に知的生活は，つまり行為と同様に思考は多様性を必要としており，したがって多様性は真理の１つの条件である。（中略）われわれは他人の真理を尊重する」（Durkheim 1955：148）。

こうしてプラグマティズムの主張を社会学的見地から弁護でき，人々に十分に納得のいく説明を与えるのは抽象的な考察ではなく，「人間的なものすべてにおけるこの上ない変化の感覚」（Durkheim 1955：149）であるとデュルケームは述べている。さらに「もし社会における生活条件が複雑なら，この複雑さは（中略）社会集団を構成する諸個人の中に見出される」（Durkheim 1955：149.）と述べ，個人の多様性を強調している。

また，デュルケームは，この時間と空間における変化性の理由に関してプ

ラグマティズムは「真理とは有用なものである」という一言を与えるだけであるとして，この学説において重要なことは，事実上真理であるものではなく，誰も認めなくても真理であるべきはずのものであるとしている。そうして，「プラグマティズムは名付けたいと思うことすべてを理想的真理と呼んでいる。それゆえに，その方法は恣意的であり，客観的価値を持たない単なる言葉の定義に彼らを導いている」(Durkheim 1955：150) と述べている。実際，プラグマティストにとって真理は思索的機能をもっておらず，彼らはもっぱら真理のプラティックな有用性しか見ていない。しかし，歴史を探るとき，人類において神話はプラティックな真理でもなく，また行動の道具とは異なる信仰によって生きていたとデュルケームは指摘する。「長い間，神話は人間社会の知的生活を表現してきた」(Durkheim 1955：159) という事実から，講義ではさらに思索とプラティックの関係について社会学的にアプローチしているがここでは割愛する。

こうして，デュルケームはプラグマティズムの論拠を否定するが，プラグマティズムは「どのように真理の概念が構築されるべきかという問題についてわれわれを徐々に熟考するようにさせたという功績を持っていた」(Durkheim 1955：171-172) と評価している。そこで彼は社会学的意味において「真理」とは何かという重要な問題に入ってゆくが，彼において重要なことは「真理の内容」ではなく，彼においては「ある観念が真理であると人々が信じる時，現実にふさわしいものとして人々が観念を見なしている」(Durkheim 1955：172) ということが重要であり，さらに「今日真実として認められているものが，明日には偽として扱われるかもしれない。われわれにとって重要なこととは，ある表象が現実に適っているということを人間に信じる決心をさせた諸原因を知ること」(Durkheim 1955：172) が重要なのである。

3. デュルケームにおける真理論

彼は，現代では一般に人々が「真理」について話す時に科学的真理のことを考えるが，科学より先に「神話的真理 (les vérités mythologiques)」が存在し，人間の思考の歴史において神話的真理と科学的真理 (les vérités

scientifique）という互いに対立する真理の２つのタイプが存在することを指摘する[14]。神話的存在の世界は実在の世界ではないが，人間はそれを信じたのである。つまり，「神話的観念は客観的実在の上に基礎を置かれたので，真実としてみなされたわけではない。逆に，思考の対象にそれらの実在を付与しているのがわれわれの観念，つまりわれわれの信念なのである。だから，実在への一致を理由とするのではなく，その創造的力（pouvoir）を理由として，観念は真実なのである」（Durkheim 1955：173）と彼は述べる。立証あるいは証明に従わせるという科学的真理とは反対に「神話的タイプにおいては，すべての真理は検閲（contrôle）なしに承認された諸命題の集合体である」（Durkheim 1955：175）と彼は述べている。証明されていないにもかかわらず，真理とされる理由は集合表象のためである。即ち「神話のこの客観性を創造するのは諸表象であり，またこの創造的力（pouvoir）をそれらの表象に授けるものを創造するもの，それは諸表象の集合的性質である。同様に，諸表象が精神に自分の価値を認めさせるという因を作るのは，諸表象の集合的性質なのである」（Durkheim 1955：175）。

ところで，諸民族は恣意的に真実を創造することはできない。「もしそれらが何も実在と合致しないなら，実際，観念や表象は集合的になることはできない」（Durkheim 1955：176）。つまり，それらは諸個人の行動と関係を有しており，挫折，失望，苦悩という経験は，行為が不適切な表象につながっているとわれわれに警告する。そして挫折などに結びついていた表象から離れるとデュルケームは説明している。この説明から，プラグマティズムによる経験主義が連想されるかもしれないが，デュルケームはプラグマティズムとは違うと明確に述べている。即ち「われわれを満足させるすべての観念が真の観念であるということが間違いだとしても，逆は間違いではない。つまり，何らかの満足をわれわれにもたらすことなしには，ある観念は真理ではない。（中略）実際，真理がわれわれ自身の一要素になるためには，真理がわれわれの役に立ち，有益である必要がある」（Durkheim 1955：176）。「プラグマティズム」講義の第一回目においてデュルケームはプラグマティストが「ニーチェ」に似ていると自称していたことに対して以下のように述べている。ニーチェの思考とプラグマティズムは普遍的真理を認めないことが共通

している。たしかにニーチェによれば，思弁的真理は，非人格的でも普遍的でも存在できない。われわれは，諸事物を切断したり，多かれ少なかれ諸事物をわれわれ自身の思考に変える方法を用いてしか，諸事物を知ることができない。われわれは諸事物をわれわれのイマージュの中でつくっている。われわれはシンボル，フィクションといった錯覚のシステム全体を実在に置き換えているということになる。それでは，なぜわれわれはこのようなフィクションをつくるのか？ それはフィクションがわれわれにとって生きるのに有用だからだとニーチェは答えている。それらは偽りであるが，人間が存続するために，真と信じられなければならないのである。それゆえに，ニーチェにとっては真に思われるものが有用であり，プラグマティズムとは深い溝があることを指摘している。この点に関してのみ言えば，デュルームはニーチェの立場に近いといえよう。

さらに，個人は実在の創造者でありながら同じやり方で世界をつくることができないならば，どのようにして複数の精神は同時に同じ世界を認めることができるのかという問題は，プラグマティストたちにはなかなかうまく解決することができない問題であったが，「もし表象が集合的作品であることを人々が認めるなら，表象がプラグマティズムの中では持つことのできなかった一致の性質を表象は示す」(Durkheim 1955：174) ことができ，問題は解決するとデュルケームは指摘する。つまり，「結局，実在を創造するのは思考である。そして集合表象のすぐれた役割とは，社会そのものであるところの，より優れた実在を『つくる』ことである」(Durkheim 1955：174.) と。

そして，彼は真理が非個人的で，道徳的規則同様，強制的性格を有していることを指摘する。すべての集合表象がプラティックなプランの上で諸個人の役に立たなければならないということは，それらが実在にぴったり適っている諸行為を起こさせなければならないということである。そしてそれは表象それ自体がよくこれらの実在に適応していることで可能になると説明する。

それゆえに，神話的世界は実在と関係を持つことによって存在が可能となり，また神話的表象が表現する実在が存在しなければならないのである。即ち「宗教が自らの表象，自らの信仰，そして自らの神話の中に示しているも

の，それは社会的実在と社会的実在が諸個人に働きかける様式（manière）である」（Durkheim 1955：177）。そして，宗教が個人に働きかける様式であるということは，「個人意識はシンボルによって手に入れた諸事物の力を借りてしか自分の感じるものを表現できない」（Durkheim 1955：177）ということを意味する。そして，彼によれば，「社会が実在を徐々に変形させ，変化させるようにするのは，諸事物によって社会が表現されるからである。こうして，神話的表象の中で，諸事物，たとえば諸々の植物が人間的感情を抱くことができる存在になる。神話的諸表象は，事物との関連で偽となるが，しかしそれらはそれを思考する主体との関連で真となる」（Durkheim 1955：177）のである。

そして，まさにそこから真理の歴史的可変性が生じるとデュルケームは考える。とはいえ，それはプラグマティズムにおける可変性とは異なっており，彼は「新しい真理が存在するとしても，古い真理は変化せず，またそのために古い真理は廃止されない」（Durkheim 1955：178）と考えている。「神話的システムに内在するすべての宇宙論（cosmologies）は，互いに異なっていが，しかしこれらの異なった宇宙論は，当然，ひとしく真理であると表現され得る。なぜならそれらの宇宙論は，それを信じる人々との関連で同じ諸機能を果たすからであり，またそれらは同じ社会的役割を持っているからである」（Durkheim 1955：178）。

彼によれば，社会世界においては科学的真理だけでなく，神話的で宗教的土台を持つであろう真理の一形式のための場所が常に存在するという。神話的表象を特徴付けるものは神話的表象が同意見の概念を表現しているということであり，また神話的表象が自分の価値を認めさせるために１つの権威を神話的表象に与えることによって検閲や懐疑から免れるということであった。こうして人間世界では民主主義，進歩，闘争などの宗教的ではないと考える諸々の定式（formule）がわれわれの社会の中で通用するのであり，しかもそうした定式はドグマの性格を持っているので人々はそれらの定式に異議を唱えないのである。

ところで，真理の非個人性と強制的性格を指摘するデュルケームは，真理の中に個人的多様性を認めるか否かという問題を提起している。彼によれ

ば，「神話的真理の支配は続く限り，慣習へ盲従することがならわしである。しかし，科学的真理の支配と一緒に，知的個人主義が現れる。つまり，真理を必要としたのはまさに個人主義であり，今後は，社会的同一性が神話的信仰の周りに確立されることはできない」。それゆえに，科学が推敲する非個人的真理は，各人の個性を認めることができる。その理由として，どんな認識対象でも極度に複雑に融合し合っていることから無限の観点を持っていることをあげている。つまり，生命的観点と機械的運動の観点，静的観点と動的観点，偶発的な観点と決定論的観点などであるが，デュルケームはこの様々な正当化される見方が存在することを認めた上で，「おそらくそれは部分的真理でしかない。しかし，これらの部分的真理すべてが共通意識の中で結合され，そこで自分の限界と自分に必要な補足を同時に見つける」（Durkheim 1955：186）と述べている。

知的多様性はこうして科学的真理の確立に必要な一要素になるが，デュルケームの見解はジェイムズが主張した自分の好きなことをする知的個人主義とはまったく異なっている。そしてデュルケームは「こうして，一方では，科学的真理は，精神の多様性と両立し，他方では，社会集団の複雑性が絶えず増大するため，社会が自発的に唯一の感情を持つということは不可能である。つまり，ここから様々な社会的潮流が生じる」（Durkheim 1955：186-187）と述べ，以下の３つの帰結を提示している。

1) **ある人は社会を静的にとらえたり，偶然の結果ととらえるかもしれないが，人々のいろいろな考えには根拠があることになる。「それらは社会が自らを感じ，自らを表現する様々な様式を示そうとする欲求に対応しているのである」**（Durkheim 1955：187）。
2) **「この変化の他の帰結とは，今後，複雑さの観念および実在の豊かさの観念の上に，したがって，必要であると同時に有効な諸意見の多様性の上に，寛容がたてられなければならないということである」**（Durkheim 1955：187）。
3) **「思索的真理の機能は集合意識を養う（alimenter）ことである」**（Durkheim 1955：187）。**そこからプラグマティズムを反駁することが可**

能である。つまり，真理は実在を「コピー」するだけではないので無用の長物とはならない。それどころか，真理は実在に「人間的世界」を付け加えており，このことによって文明は存在することができるのである。

むすびにかえて

結局，デュルケームはプラグマティズムにおける「真理の多様性」および「行為の感覚」を高く評価して，さらに真理の中に個人的多様性を認めた反面で，プラグマティストたちが真理の強制的性格を見落としたことを激しく批判していた。他方，デュルケームは，ある満足をわれわれにもたらす観念はそうした事実そのものによって真の観念であるとするプラグマティストたちの主張が間違っているとしても，逆に満足をわれわれにもたらすことなしには，ある観念は真理ではないと言及していた。あくまでもデュルケームにおいて，他者との理解とは，コミュニケーションを成り立たせている個人内システムとしての集合表象によって可能だという主張が確認できる。

そして，この視点から「真理における集合的なものさえも，個々人の意識によってのみ存在している。真理は個人によってしか実現されない」(Durkheim 1955：196) という考えが出てくるのであり，しかしながら，この一文の背後には，同様に社会によって個人は存在するという主張が隠れていることも忘れてはならないだろう。ここで，デュルケームの真理についてまとめると以下のようにいえよう。

1)　**実在を表現することは有益な機能を備えており，またその表現は社会に由来する。**
2)　**真理は社会的なものなので，それは同時に人間的なものとなり，われわれに近づいてくる。「真理における集合的なものでさえ，個人意識によってのみ存在している。つまり，真理は個人によってのみ実現する」。**
3)　**真理は生命的なものでもある。**
4)　**真理は強制的性格を有している。それゆえに，道徳的理想が行動のための一規範であるように，真理は思考にとっての一規範である。**

本講義では，真理の多元性から個人の多様性を，あるいは個人が完全に一致しないことをデュルケームは演繹しているが，その時注意すべきは，プラグマティズムを持ち出して，個人の自由で勝手気ままなもの（功利主義的なもの）を否定し，（道徳的な意味での）「理想」に基づく個人の多様性を強調していたのである。それゆえに，デュルケームは，結論において以下のことを改めて強調するのである。つまり，「真理における集合的なものさえも，個々人の意識によってのみ存在している。真理は個人によってしか実現されない。真理は社会的・人間的であると同時に，生命的な事物でもある。真理は多岐であるが，それはプラグマティズムの言うように勝手気ままなものではなく，実在に基づいて，しかも特に社会生活の実在に基づいて型取られている」（Durkheim 1955：196）と。

私はデュルケームの晩年に注目し，『宗教生活の原初形態』および「プラグマティズム」講義を通して，一般になされているような「方法論的客観主義者デュルケーム」という評価とは異なる彼の新しい解釈を行うにあたり，1つの概念を思い描いている。つまり，彼の社会観には，悟性が認識できるのは現象だけであり，決して物自体の世界を認識することはできないというカントの二元的な認識論が深く刻み込まれていると考えている。つまり，経験（行為）する主体における概念カテゴリーは現象を認識するだけであるというその視点から，デュルケームは社会学方法論の構築および現実の人間による認識行為がどのようなものであるのかという理論構築においてカントを自己解釈することによって重要な示唆を得ているということである。

その時，彼の認識論には2つの側面が存在していることに気付く。1つには社会学者としての認識であり，人々が無批判に受け入れている仮象界から，すなわち常識や価値から自由になり，物自体の世界を見ようとしているという態度である。そのために彼が利用したものが実証主義であり，法や自殺率というシンボルを利用する方法だったのである。つまり，この社会学的認識は虚偽から抜け出すための客観性を有する科学としての方法論に関与している。もう1つには，シンボルを通して行為・認識を行うという「行為論」を理解する態度である。この行為者における認識論は彼の宗教論や人間論に関与している。そこでは「仮象界」で生活する現実の人間について言及してい

る。なぜ彼の社会学は個々人の主観に頼ってはならなかったのか。そしてなぜ晩年のデュルケームは主意主義の重要さを指摘するに至ったのかという議論はカントの批判哲学に関連し，そこで重要なキー・ポイントとなるのが彼の2つの真理論であり，また真理を真理たらしめるシンボル論なのである。

彼は『社会学的方法の規準』以降，一貫してネオ合理主義の必要性を強調していた。「プラグマティズム」講義においてデュルケームは，盟友で死別したアムランを引き合いに出しながら，合理主義と経験主義について語っている。「経験主義は事物のなかに基礎をおき，合理主義は理性そのもののなか，つまり思考の中に基礎をおいている。しかし，2つの側面からわれわれはある種の真理の必然的で強制的な性質を認めており，この根本的な点からすれば，これら2つの違いはあまり重要でない」(Durkheim 1955：28) と[15]。これは前述した知的多様性を認め，またデュルケームの真理に関するとらえかたを象徴した表現であり，デュルケーム社会学を再解釈するのに重要な文章であるとの私の考えを明記してむすびとしたい。

注

[1] 以後「プラグマティズム」講義と略記。

[2]「プラグマティズムの中に生活と行為の感覚が存在しているからであり，社会学に関して言えば，その感覚はプラグマティズムと共通である。つまり，プラグマティズムと社会学は，共に同時代の子供である」(Durkheim 1955：27) と述べている。

[3] さらに，講義の中では明言していないが，1911年にジェイムズ没後に仏訳出版された『プラグマティズム』の「序文」を彼と親交が深かったベルクソンが書いていることも本講義を行う理由に深く関係している。つまり，ベルクソンは「序文」の中で，ジェイムズの真理論を自身の哲学と重ねて要約することによって，プラグマティズムと自分の哲学が同じことを主張していることを隠喩的に述べたのである。そして，当時，大きな力になりつつあったプラグマティズムのフランスでの普及を通して実証主義批判の道具にしようとしていたのである。そこで，デュルケーム自身，ベルクソンの哲学とプラグマティズムはまったく違うものであることを証明するために詳細に比較する必要が生じたのである。

[4]「プラグマティズムが強力になったということ，それはまさしく以前の理論の破綻によるものである。またそれは特に，これまで合理主義が別な真理観の探求に人を導いてきた，その不十分さによるものなのである」(Durkheim 1955：45) とのジェイムズの言説を直接否定していない。

[5] なお，デュルケームの言い間違いと思われる点に関してはキュヴィリエが脚注において

明記しており，また2人の学生において差異がある場合は保留とされているので，ある程度まで信頼できると考えられる。

[6]「集合表象」を「個人表象」と訳しているところは致命的である。そこで私は『プラグマティズム講義』を全訳し直したが，翻訳に関してはブルデューをかなり意識しながら訳している。

[7]さらにベルクソンに関する発言は重要であるが，紙面の都合，割愛し別の機会にゆずることにする。ベルクソンの哲学に関して第20講（最終講義）において論じている。デュルケームは1902年にソルボンヌの教授に就任し，ベルクソンは1900年にコレージュ・ド・フランスの教授にそれぞれ就任している。20世紀の初頭においてパリを右と左に分かつほどの学問的柱になっていたのである。とはいえ，両者は高等師範学校において同世代の秀才であり，新カント主義者であるルヌーヴィエという同じ師を持つ2人は，師の学問を継承しつつ，独自の学問を展開したのである。

[8]「われわれの精神が事物に《付け加える》ものしか有用ではない。人間にとって重要であることとは，事物の実体（la substance des choses）よりもそれらの副次的な性質である。つまり，光，色，熱などである。考慮に入れることは，われわれが実在から手に入れる用法である。しかるに，もし精神が実在を『見る』にとどまるなら，それは何に良いということになるのか」（Durkheim 1955：49）。

[9]合理主義者にとって精神と実在は2つの異なった世界であり，その間には深淵が存在する。他方，プラグマティストは実在と思考が同一プロセスに属すると考える。つまり，プラグマティストは，精神は諸事物の中にあり，また諸事物は精神の中にある。それゆえに，そこにはいかなる断絶も存在しないと考えるのである。

[10]とはいえ，彼はある意味でここに二元論が存在することも認めている。つまり，「関係としての問題」とされるならば，それはある共通部分において互いに交わる2つの連合的システムに属していることになる。すなわち，思考や表象としての客体は，私の個人的な伝記の一要素になる。それは，感覚，情動，記憶，意志といったものの連続の帰結点であり，未来に広がる一連の非常に似た「内的」作用の出発点である。他方，「事物」としての客体は，物理的作用の歴史の一要素となり，対象はその所産なのである。つまり，「もの」としての部屋は火事によって消失するが，表象としての部屋は火事を恐れる必要はないという例が示すように，それは≪主体≫と≪客体≫，≪表象されたもの≫と≪表象するもの≫，≪事物≫と≪思考≫という二元性が生じる。しかし，ジェイムズによるとそれはプラティックなディスタンクシオンを意味するのみで，結局のところ，異なる2つの経験群という観点から知覚された1つの実在に変わりないというのである。しかも感覚的知覚に限らず，イマージュや概念においても同様のことがいえると。

[11]座りたい私にとっては「肘掛け椅子」でも，アンティークコレクションを集めている人にとっては「オブジェ」であり，「肘掛け椅子」として真ではなく，別のものとして真となっているかもしれないとシラーは説明している。なお，デュルケームはこの例を必ずしも論証的ではないと考えていることを補足しておく。

[12]デューイの道徳に関する論文があるが，「彼の道徳理論は彼の真理論にまったく依存していないように思われる」（ibid., p.129.）とデュルケームは述べている。

[13]意識は単に大脳活動などの生理的現象に随伴して起こる現象であるとの説。

[14]デュルケームは，以下のように説明している。科学的真理は今日，真理そのものと考えられており，一見して，科学的諸表象と神話的諸表象は大変異なっているように思われるがそうではないとデュルケームは述べている（Durkheim 1955：178）。つまり，神話的諸表象は社会が社会そのものについて自分のために作る観念を表現しているのに対し，科学的諸真理は今のままの世界を表現するように思われる。しかし，科学的諸表象も集合表象であり，「別の手段によるとはいえ，神話的思考とまったく同様に，科学的真理は社会意識を強化するのに寄与する」（Durkheim 1955：178）と。また，彼は，さらに長い間，どんな社会でも，客観的・科学的真理への傾向と神話的真理への傾向という２つの傾向が存在するだろうと歴史的見解を述べるとともに，その事実は「社会学の進歩を遅らせる大きな障害物の１つ」になると付言している。つまり，神話的真理の研究はデュルケームにおいては重要な意味を有する反面で，科学としての社会学が明らかにする真実と対立することを示唆している。

[15]ここで，デュルケームにおける経験主義および合理主義について補足が必要となるだろう。『規準』の中で彼は，内省という方法をとってきた経験論者を批判しているする。「ひとがかれ自身だけについて観察する諸事実は余りに稀少であり，余りに消失し易く，また変わりやすいために（中略）習慣がわれわれのうちに固定させた諸観念に押しつけることも，それらについて法則を作ることもできない」（Durkheim 1895：29=1979：56）と述べていたが，ここではそのようなすべての知識の起源を経験におく経験論ではなく，『原初形態』で，たとえば，主観的時間ではなく客観的に思考される時間であることなどを挙げて，カテゴリーが個人的経験から構成されたものでも先験的なものでもなく，「基本的範疇の総体に他ならない理性は，われわれの意志のいかんともし難い権威を有している」（Durkheim 1912：18=1941［上］：37）と述べているように，一致をもたらす理性という概念を含めた経験論について述べており，プラグマティズム講義での経験論は後者を指している。また，合理主義に関して言えば，これはデカルト的合理主義であり，感覚的な経験を混乱したものとして軽視し，すべて確実な知識は生得的で明証的な原理に由来するもの，それの必然的帰結であるとするものであり，たとえば，デュルケーム自身，『規準』の中で，「デカルトは，かれが科学を基礎づけようとしたとき，すでに抱いていたあらゆる観念を疑うことを１つの法則としたが，それはかれが，科学的に練り上げられた諸概念，すなわち，かれが創設した方法に従って構成された諸概念しかもちいまいとしたからである」（Durkheim 1895：31=1979：58，下線清水）と述べている。なお，感覚的所与に組織を与える普遍的，必然的原理をそなえた精神を考えるカントも当然意識されていると推測される。

【参考文献一覧】

カント，1781，『純粋理性批判（上・中・下）』篠田英雄訳，岩波文庫，1961年。
作田啓一，1983，『デュルケーム』講談社。
ウイリアム・ジェイムズ，1907，『プラグマティズム』桝田啓三郎訳，岩波文庫，1957年。
――『プラグマティズムとは何か』桝田啓三郎訳，岩波文庫，1957年。

Émile Durkheim, 1895, *Le Régles de la méthode sociologique*; 23e éd., Presses Universitaire de France, 1987.（デュルケーム『社会学的方法の規準』佐々木交賢訳，学文社，1979年）。

——, 1912, *Les formes élémentaires de la vie religieuse:le système totémique en Australie*, Presses Universitaires de France; 1960.（デュルケーム『宗教生活の原初形態』古野清人訳，岩波文庫，1941年[上], 1942年[下]; 1995年）。

——, 1955, *Pragmatisme et sociologie*, avec une 'Preface' de A. Cuvillier, Vrin.